川崎病ガンマグロブリン療法後の免疫能調査

薗部友良、崎山幸雄、古川　漸、原田研介、関　一郎、
浅井利夫、長嶋正実、鈴木淳子、西林洋平、瀬戸嗣郎、
古庄巻史

要約：川崎病ガンマグロブリン療法の有効性が認められてほぼ標準的な治療法になってきた。今までガンマグロブリン療法を受けた小児は多いが、はっきりした投与直後以外の副反応は知られていない。しかし川崎病のガンマグロブリン療法後に麻疹予防接種を受けたもののなかで充分な麻疹抗体獲得をしていないものがあることが判明したので、ガンマグロブリン療法後の移行麻疹抗体価の推移などから麻疹予防接種の最適時期などを検討するための研究に着手した。

見出し語：　小児慢性特定疾患、トータルケア、川崎病、ガンマグロブリン療法、麻疹予防接種

【目的】

川崎病ガンマグロブリン療法の有効性が認められてほぼ標準的な治療法になってきた。ガンマグロブリン療法を受けた小児がその後に何か免疫学的に異常を生じるのかということに関心がもたれている。幸い現在までの所、重症感染症などでガンマグロブリン療法を受けたものも含めて、はっきりした異常は報告されていない。しかしガンマグロブリン療法による移行麻疹抗体の影響を受けたと思われる麻疹予防接種の抗体非獲得例の存在が日米から報告されている。また今までの川崎病管理基準案では罹患後２カ月すればいかなる予防接種も可能とされてきたが、これはアスピリン治療を念頭においたもので、ガンマグロブリン療法のことは考慮されていない。未だに本邦において罹患・死亡例が多く、移行抗体の影響を受け易い麻疹に対する予防接種を施行する最適時期などを検討する必要性があるので今回プロジェクトチームを結成した。

【方法と対象】

研究は以下の３種類である。　①今までの川崎病罹患後に麻疹予防接種を受けた例の抗体獲得状況を調査し、治療法や川崎病罹患後から接種施行までの期間等を検討する（レトロスペクティヴ研究）。　②これからガンマグロブリン療法を受ける例に対して、移行抗体の推移を経時的に観測する。移行抗体消失後実際に麻疹の予防接種を行い、麻疹抗体獲得の有

日赤医療センター小児科：

無を検討する。これらから麻疹予防接種最適時期を検討する（プロスペクティヴ研究）。　③本研究班の他のプロジェクトチームと共同でガンマグロブリン療法後の川崎病再発例の頻度や重症感染症など重大な免疫学的異常を示唆するものの頻度などを検討する。

対象は主としてガンマグロブリン療法を受けたものであるが、今までの例の麻疹抗体獲得状況の場合は治療法の種類は問わない。麻疹抗体はＨＩ法で測定し、補助的にELISA−IgG法を併用する。ガンマグロブリン療法後の移行麻疹抗体の推移検討のための測定時期は治療前、治療終了後１－２日、発病約１カ月後、発病２カ月後、発病６カ月後とした。抗体消失後麻疹予防接種を行い、２カ月後に麻疹抗体を測定する。

研究施設は北海道大学、順天堂大学、日本大学、都立墨東病院、東京女子医科大学第２病院、名古屋大学、国立循環器病センター、松山日赤病院、島根医大、小倉記念病院、各施設の関連病院、日赤医療センター（順不同）の各小児科である。

〔結果〕

現在各プロトコールに基づいて検体採取中である。しかしレトロスペクティヴ研究の場合、患児の両親の承諾を得て、来院の上採血する必要があること、プロスペクティヴ研究の移行抗体推移の場合は採血が長期にわたり脱落例がで易いことなどで、まだ評価できるだけの症例数に達していない。今後数年かけて必要症例数を獲得する予定である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:川崎病ガンマグロブリン療法の有効性が認められてほぼ標準的な治療法になってきた。今までガンマグロブリン療法を受けた小児は多いが、はっきりした投与直後以外の副反応は知られていない。しかし川崎病のガンマグロブリン療法後に麻疹予防接種を受けたもののなかで充分な麻疹抗体獲得をしていないものがあることが判明したので、ガンマグロブリン療法後の移行麻疹抗体価の推移などから麻疹予防接種の最適時期などを検討するための研究に着手した。